

Title	「現場力」ノオト(2011年・春)
Author(s)	西村, ユミ; 小林, 恭; 安田, 伸行 他
Citation	Communication-Design. 2011, 5, p. 81-93
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6537
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「現場力」ノオト (2011年・春)

西村ユミ (大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD)

小林 恭 (大阪大学 CSCD)

安田伸行 (介護職)

岡野彩子 (大阪大学 CSCD 招へい研究員)

池田光穂 (大阪大学 CSCD)

樫本直樹 (大阪大学 CSCD 招へい教員)

本間直樹 (大阪大学 CSCD / 大阪大学大学院文学研究科)

西川 勝 (大阪大学 CSCD)

上條美代子 (看護師)

高橋 綾 (大阪大学 CSCD 招へい教員)

“Genba-Ryoku” Note (Spring 2011)

Yumi Nishimura (Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University)

Kyo Kobayashi (CSCD, Osaka University)

Nobuyuki Yasuda (Caregiver)

Ayako Okano (Visiting Researcher, CSCD, Osaka University)

Mitsuho Ikeda (CSCD, Osaka University)

Naoki Kashimoto (Visiting Academic Staff, CSCD, Osaka University)

Naoki Homma (CSCD / Graduate School of Letters, Osaka University)

Masaru Nishikawa (CSCD, Osaka University)

Miyoko Kamijo (Nurse)

Aya Takahashi (Visiting Academic Staff, CSCD, Osaka University)

「現場力研究会」を開催して、2011年5月で5年2ヶ月(開催回数118回)となった。「現場力」ノオト(2011年・春)は、この研究会での議論をもとに、参加者一人ひとりが関与している多様な「現場」、そこでの出来事や経験、その場の特徴、テーマやそれらを理解するための概念を取り上げたものである。本稿では、9編の気になる現場の事象やその論点を紹介する。

キーワード

現場力、参加、経験

Genba-Ryoku (empowerment faculty and sensibility in practice), participation, experiences

まえがき

現場には、いろいろな経験や特徴が明示化されないままに埋め込まれている。いつも経験しているにもかかわらず、それを言語化しようとすると言葉に詰まる実践もある。これらの「現場」の営みは、丁寧に見つめ直したり、論点を整理し直したりすることで、新たな切り口をもって浮かび上がってくるだろう。

「現場力研究会」は、多分野の専門家や実践家が集まり、こうした試みを続ける研究会である。2006年に開始して、2011年5月で118回を数える。「現場力」ノオトは、この研

研究会での議論をもとに、私たちが関与する多種多様な現場の営みや概念を、一人ひとりの参加者がじっくり考えて綴った「ノオト」である。既に、『『現場力』研究術語集』として『Communication-Design』の0～2号（西村他 [2007] [2008] [2009]）に26の術語を、4号の「現場力ノオト」（西村 [2011]）には12のことばを紹介してきた。

本稿では、2010年度後半から2011年度前半の研究会における議論や、これらの議論に触発されて参加者が関心をもった現場の営みから編み出された、9編の気になる現場の事象やことば、その論点を紹介する。この間私たちは、具体的な現場での経験の紹介とともに、気になっている「詩」を持ち寄って音読し、これを味わいながら議論をしてきた。この試みも、「ノオト」に反映されている。

また、この間に新たなメンバーが加わり、それに伴って新たな視点も議論に加わった。どれも現場では、確かに見えたり経験したりしているけれども、言葉にし難い、あるいはあまり言語化してこなかった視点ばかりだ。参加者一人ひとりの経験を拾い上げて、その経験に合ったスタイルで記述することも目指している。この「ノオト」で紹介した「ことば」や「経験」が、現場において使用されつつ吟味され、同時に現場に組み込まれていくことを期待する。

引用文献

西村ユミ・本間直樹・志賀玲子・鳥海直美・池田光穂・伊藤京子・工藤直志・西川勝・仲谷美江・渥美公秀（2007）「『現場力』研究術語集」『Communication-Design 2006』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：215-229.

西村ユミ・本間直樹・志賀玲子・池田光穂・工藤直志・高橋綾・仲谷美江・山崎吾郎・西川勝（2008）「『現場力』研究術語集（第2報）」『Communication-Design 1』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：203-216.

西村ユミ・志賀玲子・池田光穂・山崎吾郎・仲谷美江・本間直樹・高橋綾・菅磨志穂・西川勝・松本篤（2009）「『現場力』研究術語集（第3報）」『Communication-Design 2』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：189-201.

西村ユミ・西川勝・池田光穂・高橋綾・榎本直樹・本間直樹・安田伸行・小林恭（2011）「現場力ノオト（2010年・秋）」『Communication-Design 4』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：87-100.

（西村ユミ）

1.

あぎよ じゃくご

下語・著語・付け句—コミュニケーションにおける非連続の連続

「老師、下語ってどういう意味でしょうか。一わしがきゅうすを取り上げると、あんた湯をとり台所にはしりなさる、それが下語や」（森本省念言行録）。下語（または著語）の通常の意味は、禅語録などで古人の言行に対し当処即席に下されたコメントのことで、多くは辛辣な野次のような形をとる。森本省念はここでは言葉によってなされるという狭義の意味をこえてその事柄の本質を直指し、その応答が同時に下語の実演となっている。

俳諧という言語表現に制約された領域のことであるが、連句の付け句にもそれと共通の本質が見受けられる。付け句の場合、付けることによって一つの意味世界から新しい意味世界へと非連続の連続的に転じてゆく。そのとき前の句の世界から「新しくガラッと、或いはなんとなく」転じていなければならない。元禄三年に巻かれた次の歌仙の例は一つの典型である。「さびしさの底ぬけて降る雲かな（丈草第一句）、ちらちら光る糠の埋火（去来第二句）、鯨ひく沖に一浜家あけて（芭蕉第三句）」。句と句の行間が意味地平としての世界を破り超えて、絶対「無」意味空間である虚空へと通じ、「そこから翻って新しい意味世界が投企され（略）世界から世界への転調が虚空に響き匂う」（上田 [1999] : 211）。

これらに見られるのはAに対するBの何らかの呼応関係である。一般にコミュニケーションという場合、平面的な横のつながり方つまり連続面に着目されがちだが、下語や付け句によって大写しにされるその構造が示唆するのは、どこまで自己の底を突き破るか、時間をも前後際断するか、その程度に応じてコミュニケーションの質が変わってくるということであろう。応ずるB自身における切りの深さに応じて、元のAの姿もより深い本来の姿を現してくるのである。

看護や介護の場面で、親しみを表すために乱暴な言葉を用いるのがよいか丁寧な言葉がよいかと問題にされることがある。「さびしさの底ぬけて」語る丁寧語／べらんめえ、どちらであれ要は、底ぬけの寂しさから語り出されるかどうか、相手が底なしの存在と見える処から語られるかどうかであろう。しかし、これが自己の努力の目標や功績と見なされるや否や、南面して北斗を求む如き自己矛盾となるだろう。底が抜けない半端な自分、底を塞いでばかりいる自分の半端さを徹底して自覚しつづけるに相即して期せずして拓かれゆくものではなかろうか。

引用文献

上田閑照 (1999) 『実存と虚存』 ちくま学芸文庫.

(小林恭)

2. シンプルな言葉

「よくわからないけど、自分たちがお年寄りにとって良いと思ったことをやっていけばいいんじゃないのかなあ・・・。」

フレーズだけ見ればごくごく単純で“当たり前”、かつ、“言葉足らずな言葉”だ。しかし、そこにいた会議の参加者は二時間以上議論を重ねた最後の最後、控えめに発せられたその「シンプルな言葉」に共鳴した。

これは僕が働く介護施設で、介護職のほか、施設長や看護師など多職種が集まり開かれた会議での出来事である。それまでの仕事のあり方を反省し、自分たちの取り組みを再度見直すために「自分たちはどのような介護をしていくのか」というテーマで一度話し合おうと会議が開かれた。

「お年寄りの望むことに応えていく介護がしたい。」「じゃあ、声を出せない人みたいに望んでいることがわからない人はどうするの?」「その人がそれまでどのように生活してきたのか、その暮らしの中から考えればいいんじゃないのかなあ?」「でもそれまでの生活が『いまの望み』を反映しているとは限らないよ。」「仮にそれがわかったとしても職員の人手が足りない中、はたして実現可能なのかなあ。」「応えられないことが起こるのは当然だし、そのことをどう考えるのかが大事なんじゃないのかなあ。」「こちらの考えの裏側にあるマイナス面も考えないと綺麗ごとで終わってしまう気がする。」

会議は、脱線と修正、前進と後退を繰り返しながら進んでいった。そして、着地点が何処にあるのか誰もが見出せないまま時間は過ぎ、散々議論を交わした末に辿り着いたのが、はじめに書いた「良いと思ったことをやっていく」だった。

会議では、そこにいる者同士が、その時の手持ちの論拠を拠り所に、その場で声を発し、その時に全員で議決へと向かわなければならない。そこには事前に約束された結末もそれを導く案内人もいない。何がどっちにどう転ぶかわからない曖昧さと、思考の果てで言葉が行き場を失くすような不安定さを常に背負っている。それゆえ、時として「シンプルな言葉」が、論理をあきらめた怠惰でも、知識や想像・言葉の欠如による不完全さからでもなく、むしろそれらを自覚し、それらを突き抜けるものとして、「納得」に至る可能性を帯びることがある。

「到達されたシンプルさ」とも言うべきその言葉は、互いにもがきながらも、ともに考え抜くことをやめないでいる者たちのもとで育まれ、不明な事態にとどまり続ける勇気と、混迷を決して無駄にしない真摯さが手繰り寄せる希望の原石として、立場を超えて響き合う。

(安田伸行)

3. 痛みの経験

いつもの喫茶店で、いつものカフェオレを注文し、いつものように本を読む。いつもの時間に帰ろうと立ちあがったその瞬間、今まで経験したことのないもの凄い痛みが左足を襲い、そして麻痺して、動かなくなった。「痛い、痛い！」という絶叫の後に訪れた不気味な沈黙。しかし翌朝、痛みは再び目を覚ました。「痛い、痛い！」そしてまた沈黙。そのくり返しの日が続く。

病院で検査を受ける。痛みの原因はわかったが、痛みそれ自身は画像にも数値にもあらわれない。痛みは目に見えない。だから人に伝えるのがむずかしい。人の痛みを想像するのはなおさらだ。昔サファリで縞馬がライオンに生きたまま食べられるのを見た。悲鳴もあげず、黒くてまるい優しい目をしていたので、不思議な気持ちで眺めていた。

痛みは訪れて数日すると、私の心まで支配するようになった。そして人の痛みにたいする私のまなざしはますます見失われてしまった。誰にもわかってもらえないという孤独感と、思うように動けない苛立ちと、悲しみと、訳のわからない不安とでぐちゃぐちゃになり、どうにも心を治めることができない。こんな時、本当はひとりになりたい。でも自分では水もくみに行けない。看護してくれる人に感謝しているのに、衝動的に傷つけるような言葉を浴びせてしまう。自分が嫌いになる。大声で泣いて、泣いて、そして泣きつかれた。

その時、私の大学の先生がいつも仰っていた言葉が想い起された。「ありのまま受入れることです。」あらゆるものは移り行き、姿を変えて行く。一切は消えてなくなって当然のもので、この手に握りしめておけるようなものは何もない。何かある状態に価値があるかのように思い込み、固執するところに苦しみがある。「そのままでよい、そのままでよい。」宇宙の果てから囁きかけるようなその声に、じっと耳を澄ましてみる。すると心がすうっと軽くなって、なぜだかわからないけれど、それまで心に重くのしかかっていた様ざまなことがあまり気にかからなくなった。和解してくれたのか、痛みはその後私の心を支配するのをやめてくれた。

手術を受けて半年が過ぎた。あの突然の来訪者は、今はわずかな後遺症という足跡を残しているだけで、姿をあらわさない。痛みの経験は、今までとは少し違ったまなざしを持つことを教えてくれた。訪ねてくれてありがとう、と素直に思う自分と、ではまた来ていいかと聞かれると、苦笑いする自分がある。

(岡野彩子)

4. アンドロイドは現場力を発揮することができるか？

標題の疑問に答えるとすれば、それは「否」である。あるいは現場力を身につけたアンドロイドは、もはや、そうだと定義できず「新人類」なのである。この思考実験とそれに対する私の応答は「ロボットに演出をつける」という荒唐無稽なプロジェクトへの揶揄ではない。ロボット演劇チームの狙いは、この問いへの技術的応答にあるのではなく、この試みを通じた技術と演劇の予期せぬ創発的な展開を引き出すことであり、ここでの私の態度は偽悪漢ぶっているだけである。かくのごとく、現場力は人間の定義にまで及ぶ重要な属性であることを論証しようというのが私の狙いである。

私は現場力が発揮された場所において、(定義変更の前のアンドロイドを含む) 行為者たちとその周囲にみられる抽象的属性を次の5つに分けた。1) 場所性・状況性、2) 意識性、3) 物理性・道具性、4) 媒介性、5) 身体性である。私は現場力を、個人や集団が「所有」できる技能や能力ではなく、場所に依存した行為者の能力の顕現であり、身体が深く関わるコミュニケーションの延長に位置づけられるために「きわめて社会的な概念」であると述べた(池田 [Online])。

私は過度の人間中心主義者ではないが、実験状況において高度に組織化された実験統制状況におかれた一部の高等霊長類を除けば、人間は、行為や意識の中に未来の時間的要素を組み込める高度で複雑な情報処理をおこない、さらにそれを言語により外部表象化できる——つまり個体間で正確な情報伝達とその蓄積が可能な——ほとんど唯一の動物であると考え。いやいや集団で狩りをするチンパンジーも臨機応変な現場力をもっているではないか、という反論があるかもしれない。だが、件の動物は上記の3) に属する狩猟道具を使うことができない点で失格である。近年の発掘成果によると北米最古の先史考古文化のクロービス人(紀元前1万3千～8千5百年前)は、効率的な狩猟道具の発明によって大型ほ乳類の大量虐殺と絶滅という人類の「はじめての原罪」という不名誉をほしいままにしている。現場力をはじめて身につけたアンドロイドは、その見事なしぐさによって人間の魂を打ち震わすだけではなく、アンドロイドに仕事を押し付ける人間に反感をもち、人間にとっては都合の悪い現場力をつける可能性がある。そのためにも、この問いの答えは「否」であってほしいのだ。

引用文献

池田光穂, Online, 現場力,

<http://www.cscdosaka-u.ac.jp/user/rosaldo/060518genba.html> (最終確認日: 2011年5月12日)

リドレー, マット (2002) 『徳の起源: 他人を思いやる遺伝子』 翔泳社 (Ridley, Matt (1998)

The origins of virtue: Human instincts and the evolution of cooperation. New York: Penguin.)

(池田光穂)

5. 現場への住み込みとプラン

仕事をしていると、それまで働いていた勤務場所から別の場所に移ることがある。この異動の経験は、実践の成り立ちの考察に重要な示唆を与えてくれる。例えば、職場を変わったばかりの知人は、「時間を全部、組み換えないといけない」と言っていた。つまり、新たな現場で経験する課題は、単に、新たな知識や技術、その場のルール等を知らないことよって生じることではないようだ。

ある看護師に、新人の頃に「タイムスケジュール表」を使っていたことを教えてもらった。そこには、勤務時間内に行うこととその時間が大まかに記されていた。たとえば、9時に手術室へ患者を送り、10時に点滴をするというように。休憩や勤務の交代時間も記されて、それまでに行うことも計画されている。いわば、1日のプランが記された媒体である。

このようなプランは、自分の動き方を決めるのと同時に、他の看護師の動きに関心を向けたり、それを知ったりすることを可能にしている。彼らはしばしば、他の看護師と情報や経験を交換したり、協力し合ったりする。新人が初めて行うケアには先輩看護師が同伴する。廊下を歩きながら、他の看護師や患者の状態を見渡してもいる。その際、このプランによって、自分がしていることと他者のそれとが照合されたり、他者の動きに合わせて自分の仕事が決められたりもする。新人が先輩に支援を求める際には、互いが相手の仕事の優先順位に関心を向ける。交代で昼の休憩に入る前に、病棟に残る看護師に依頼される仕事の内容から、仕事の進み具合もわかる。

しかし仕事は、いつもつねにプランの通りに進むわけではない。むしろ、患者の病状の変化や訴えへの応答、急な入院などがつねに想定されている。にもかかわらずプランを立てるのはなぜだろうか。もちろん、仕事のペースを作ることもその理由に含まれる。が、それだけではない。プランがあることによって、改めて確認しなくても、他の看護師の仕事の進捗や患者の状態が概ね見て取れたり、それらを通して病棟全体が展望できるためだろう。このように、時間を柱として他者の行為や場との繋がりが実現しているのであれば、場所を変えることは、異動者に宙づり状態を強いることでもある。知人が語った「時間の組み換え」は、この宙づり状態から新たな現場への住み込みを志向した言葉であろう。プランはそのリソース (サッチマン [1999]) にもなっているのだ。

引用文献

サッチマン, AL (著)、佐伯 胖監 (訳) (1999) 『プランと状況的行為——人間—機械コミュニケーションの可能性』産業図書。

(西村ユミ)

6. 価値観を差し挟むこと

パターンリズムについて考えている時、授業の準備のためと思い、あるドキュメンタリーを見た。子どもの頃から大きな病気を患ってきた18歳の少女が延命治療を拒否し、最後には亡くなってしまうという話だ。両親は娘の選択（本人の知持ち）を尊重したいと考えてきたが、実際に治療が拒否され、娘の死期が近づくにつれ気持ちが大きく揺れてしまう。ある日、父親が主治医に相談をする。そして、その主治医は「個人的には生きてほしい。でも私の価値観を入れてはいけないので、家族で決めてほしい」という主旨の返答をした。なぜだか見ていて、ものすごく違和感を感じた。なぜ口を挟めないのか。なぜ何も言えないのか。それが相手の考えを尊重することなのか。そして、パターンリズムでいいじゃないか、とも思った。

パターンリズムを認める理屈がないと、現場の人、すなわち問題に直接的にかかわる人たちにかかわることが出来ない。いや、かかわることは出来ても何も言えない、ということになる。なぜなら、それは私の問題ではなく、本人（たち）の問題だからだ。その人のことに関してはその人の決定や判断が認められなければならない。この少女がこれまで辛い思いをし「もう十分ががんばった」という想いは頷けるし、認めたい。でも、「少しでも長く生きていて欲しい」というのも親心だ。そして、この主治医もこの少女にかかわっているならば、なぜ「生きてて欲しい」と口を挟めないのだろうか。

しかしながら、そもそもなぜその人の決定、ないし判断は認められなければならないのか。それは「その人のことについてはその人が一番よく知っている」という前提があるからであり、その人の決定を認めることが、その人を認めることにつながっているからである。ただ、その人のためにもっとよい選択がある時、口をはさんだり、押しついたりすることも、その人を認め、尊重しているからである。つまり、その人の自己決定を認めることとパターンリズムの行いは同じところから発していることがあり、同じその人の尊重という場に根をもっている。ただ、このことは、その人にかかわることの理由にはなっても、そのことがそのまま、その人の意志に反して何かを決めてよい、ということの理由になるわけではない。

たしかにその通りである。しかし、…。ここから先が続かない。その人が決めたことだから。これだけでは何かを取りこぼすような気がしてならない。

参考文献

立岩真也 (1999) 「子どもと自己決定・自律——パターンリズムも自己決定と同郷でありうる、けれども」 後藤弘子 (編) 『少年非行と子どもたち』 明石書店。

(榎本直樹)

7. 私はいつも彼をカメラ越しに

彼はそこにいた。

いつのころからだっただろうか。いや、そんなことはどうでもよい、私は、いつともなく、興味本位で手にしたビデオカメラ越しに、ダンスであるともダンスでないともいえない、彼の全身が繰り出す多彩なかたちをフレームのなかで追いつけるようになったのだ。あるときは木のように風に揺れ、あるときは枯れ葉のように坂道を転げ落ち、あるときは老婆と戯れる。彼はいつもそこにいた、それは確かだ。

私は目の前にいる彼を見ない。肉眼で見る代わりに、手にしたビデオカメラで触れている。遠隔視覚をとおして、彼の、もう一つの皮膚を撫でるのだ。触覚が、触れているものしか感じることができないように、カメラの触覚は、彼のからだの一部分、ほんの少しにしか接することができない。触れた手がほどけ、宙ぶらりんになってフレームが空をさまようこともしばしばだ。しかしその分だけ、フレームのなかに彼が到来し、再び手応えが得られたときには、唯事ではない興奮が画面に満ち溢れ、私の手は必死にすがりつこうとする。彼の像に。

彼の像は、私の手のなかで私だけのものとなる。つまり、私と彼のあいだで、特異で、他の誰とも分かち合い難い結びつきが生まれる。にもかかわらず、それが映像として再生される瞬間には、変質し、その姿が見る者すべてにあられもなく曝け出されてしまうのだ。そこで人が見るのは、そこにあったはずの結びつきの痕跡でしかない。

それにしても、生ける身体のうちみだす奇跡、ダンスを映像化することほど、ばかげた試みはない。「ダンス映像」が無数にばらまかれようとも、ダンスは肉眼で見るべきである。肉眼こそが、重さをもった塊としての身体をありのままにとらえ、それを空間の奥行きと時間の厚みのただなかで享受する。それに比して、カメラを通してみる身体の像の救いようのない薄っぺらさときたら！それは紛れもなく虚像であり、存在を欠いた存在、非実在である。

にもかかわらず。私は追う、それに触れようとして。それは動く、生ける身体の分身として。カメラに残されているのは、物質へと変質した、彼の生ける身体と私の生ける身体の絆の痕跡なのだ。そして、絵画や小説のように、そこにあったものに対して同意する者だけが、その痕跡から絆を取り戻すことができる。つまり、ダンスの手触りがそこで生まれ直すのだ。

映像は何も残さない。何も記録しない。かつて触れた感覚を思い出し、そこに手を伸ばすために、届かない目の前に現れるにすぎないのだ。

(本間直樹)

8.

おもしろい会議

「おもしろい会議」もあるもんだと唸った経験を紹介する。平成23年3月16日の夜、東舞鶴の商店街で開かれた「種は船 in 舞鶴」のミーティングである。アーティスト日比野克彦さんが、舞鶴の市民たちと一緒にやっているプロジェクトの一環である。朝顔の種の形をした船をつくって、それで海に出ようというのだ。数年前から各地で同様の活動をしている日比野さんは、舞鶴での活動は2年目、いよいよ来年には本当の船として、種を海に走らせるつもりなのだ。シャッターを閉めた店が目立つ商店街に、がらんとしたアートスペースが改装されて会場になった。会議が始まる時刻になっても、人はすぐには集まってこない。でも、ぼちぼちと来た人が椅子を並べたりして会場を用意する。奥の部屋からはカレーの匂いがしてくる。たまたま参加することになったぼくを見ても訝しむ人はいない。誰が来てもいいのだ。木と段ボールでつくった種船の模型は完成して舞鶴高専の倉庫に移されてある。のべ5,000人以上の人が関わった。

会議には種船を愛しはじめた人たちがやって来る。腕のいい大工さん、お母さんと一緒の小学生、介護施設の栄養士、造船工場の技術者、船の検査をする偉い人、海岸沿いのホテルの従業員、学生、職業不明のおじさん、お洒落なお姉さん、高専の先生、カレー屋さん・・・いろんな人が次第に集まって、狭いスペースは人でぎっしりと詰まった。

日比野さんが壁にポスターの裏紙を貼って会議が始まる。彼はほとんど具体的な提案はしない。「あの船で海に出たい」というだけである。海に浮かぶための素材をみんなが考える。専門家の意見は尊重されるが、奇想天外な意見も飛び出す。動力は何にするか。手で漕ぐのかエンジンをつけるのか、エンジンがあると船検（車検みたいなもの）を受けないといけない。それに合格するには、どうすればいいのか。できた種船を車で運ぶには、道路交通法の基準に合わなければ分解しないといけない。それは面倒だな、じゃあ、この形を変えてみようか。完成予定までのスケジュールはどうするの、船の設計士を見つけないとね。やってくれそうな人はどこにいるかな。予算は大丈夫か。いろんな意見が出ては、日比野さんのスケッチになって壁の紙に描かれていく。会場にカレーの匂いが強く漂い、議論も熱くなっていく。異なる人たちのコミュニケーションデザインが実際に目の前で繰り広げられていた。

(西川勝)

9.

場を担う

電車を降りようとしたら突然一人の男性がホームで倒れた。傍の方がとっさに頭をカバーされた。意識がないようだ。痙攣もしている。「どなたか？」という鋭い声にも、私は早く通り過ぎたかった。約束の場所にとても急いでいた。しかし、「それでいいの？」と聞こえた気がした。ご先祖さまならぬ「故・患者さま群」「先輩群」からの声も聞こえてしまった。私だけに呼びかけられたわけではないが、いつでも応えるようにと育ったからか、身体が動いてしまう。約束は捨てた。「私はナースです！」と、人だかりに駆けより見知らぬ方と一緒に救急対応を行った。俄かチームだがお願いしたらスムーズに動いてくれ、事なきを得た。救急隊に引継ぎ、俄かチームは自然に解散した。私があわてて電話連絡をしていると、「凄いですね。ガードしながら応援していました。」と見物客かと思った方から声をかけられた。あれはガードだったのか、応援だったのかと、自分に言い聞かせ「おかげさまで、助かりました。有難うございました。」と目礼した。あの場がチームだったこと、いい仕事と第三者評価されたようで何だか嬉しくなった。

昨今の若者は誰でもよいという仕事には価値を置きにくいと聞く。難儀なことだ。「仕事に雑務はない。雑務になってしまうかどうかはあなた次第」と上司や先輩に教えられた。誰でもよいが誰かがすることによって家庭も社会も成り立っている。どんな仕事もそれを支えている。そして、その支え手になれるかどうか、いつでも代わられるかどうかで人としての真価が問われるように感じる。思いがけない評価は後からも効いた。私は理不尽やジレンマを前に立ち尽くす時、神や仏が見てくれているから、見てくれているであろう神や仏を感じ、探し、振り返り、確かめている時がある。あの方は「神さま」のお使いだったのかもしれない。救急のような例は一見派手に見えるけれど、黙って動いてくれた方々の弁えのある参加の仕方が心地よく信頼できた。それは共に仕事をするとき力が判るからだろうか。手を出すくらいだから大丈夫なレベルの人だろう。目標がひとつだから？しがらみが無いから？さまざまに考えた。今回、応援ウォッチングという参加の仕方があることも知った。病院の訓練された専門職集団でなくても「救命」という共通目標を前にその場でチームが組めること、一瞬のためらいを越え、自（みずか）ら、自（おの）ずからの行動となったことも収穫だった。

(上條美代子)

10. 障害を笑う（其の二）

障害を笑うということは何を意味しているのだろうか？せむしのピエロや、脳性麻痺ブラザーズの笑芸や、性同一性障害を主張する、男女と白衣メガネの素人笑芸（ひし形、[Online]）の一場面のあいだに、なにか共通なものが見いだされるだろうか？どのように蒸留したら、えもいわれぬ芳香、というより、鼻をつく臭いが漂うこれらさまざまなものの中から、そのエッセンス、しかも常に同一なエッセンスを取り出すことができるのだろうか？笑い一般については、アリストテレス以来最も偉大な哲学者が取り組んできたが、障害を笑う、という刺激臭を放つテーマが、哲学者の上品な鼻を引きつけることは——かなりの異臭をまき散らしているニーチェその人を除けば——なかったと言えよう。

私は無謀にもそれを扱おうとするわけだが、この年中詰まり気味の鼻がかぎ出そうとするのは、ベルクソンのような、何がおかしさを生じさせるかという笑いの認識論でも、フロイトのような笑いの力動論でもない。むしろ、笑いという情動の存在論、とでもいうべきものである。

えてして我々は、人間の口角に認められるある種の動き、腹腔から絞り出された呼吸が起こす破裂音の一種を指し、笑いの定義としがちである。また、「笑いとは優越感である」（ホップズ）といった表現にも満足してはられない。私が問題にしたいのは、人間が「笑うことを心得ている動物」と定義される時の、極めて人間的な情動としての笑いであって、口角を上げる、優越感を持つといった畜生にもできそうなことは、つまらぬことを吠え立てる警察犬にでもくれてやればよい。

ベルクソンも述べるように、笑いにはある種の「無感動」が必然的に伴う。（Bergson [1900=2001]）人間失格の我が相方に強い憐憫あるいは激しい軽蔑を催す者がいるとすれば、そこに笑いが到来することはあるまい。しかし、私は全ての人間的な事象から感情の音楽を切り離すだけで笑いが生じるという氏の「笑い＝純粹知性」説には賛同しかねる。純粹に知性だけの人びとが笑いの夢を見ることはない。笑いとは、知性と呼ぶにはあまりにも人間的な情動なのであって、それは、憐憫と軽蔑の、また感動と知性のいずれでもなく、両者の「底が抜ける」ようなもう一つの情動、あるいは「非情」の情（小林 [2009]）なのである。もちろん、それらが相方とともに墜ちていく先は氷水のプールであるが。（以下、次号）

引用・参考文献

Bergson, Henri (1900) *LE RIRE*, PRESSES UNIVERSITAIRES DE FRANCE = (2001)

鈴木力衛、仲沢紀雄 (訳) 「笑い」、『ベルクソン全集3』、白水社、2001.

ひし形 (2008) ショートコント 「僕が僕であるために」

http://www.youtube.com/watch?v=A_N6_yCsEC4

小林恭 (2009) 第91回現場力研究会配布資料.

(高橋 綾)

